

「予防可能な認知症の最大危険因子」と国際アルツハイマー病会議で発表された

難聴を放置していると認知機能が低下することがわかってきました。慶応義塾大学医学部（耳鼻咽喉科教室）小川郁（かおる）教授に、「認知症」と「難聴」の関係、聞こえの改善のためにできることを聞きました。

竹本恵子記者

慶応義塾大学医学部
耳鼻咽喉科教授

小川 郁さん

「認知症の危険因子として難聴が注目されています。」



2017年に開かれた国際アルツハイマー病会議で、ランセット国際委員会が「認知症の約35%は予防可能な九つの原因により起こると考えられる。そのなかで難聴（9%）が最大の危険因子である」と発表しました。

九つの予防可能なリスクは糖尿病や高血圧、社会的孤立、うつなどです。なかでも、難聴は（予防可能な）最も大きいリスク因子とされています。

厚生労働省の新オレンジプラン（認知症施策推進総合戦略・15年）でも、難聴は危険因子の一つとしてあげられています。

健康 らいふ

団塊の世代が後期高齢者となる25年、認知症の人は予備軍と合わせて1400万人になるといわれます。補聴器が必要な難聴者も今後10年間で1400万人から1600万人になるといわれています。大変な数です。そういう意味でも認知症予防に難聴対策が注目されています。

「聞こえの悪さに気付いたら？」
現段階では加齢性難聴を治療する方法はありません。
中等度以上（聴力レベル40デシベル以上）の難聴と診断されたら、なるべく早く補聴器を使うことを検討しましょう。

早期での補聴器使用が大事



どの感情を抱いたり、考えて言葉で返したりします。しかし、聞こえが悪くなると、脳は

難聴になると
音の刺激が少ない状態
認知機能の低下に…

感じたり、考えたりすることが少なくなり、認知機能の低下をまねくと考えられます。難聴になると、コミュニケーションが減り社会的に孤立します。そのことも、認知機能の低下につながります。また、認知症と難聴に共通の原因があると考えられます。認知症の大きな原因は循環障害、血流障害です。耳は非常に小さな器官で血管は非常に細くつまりやすい。そのため血流障害によって聞こえが悪くなることがあります。

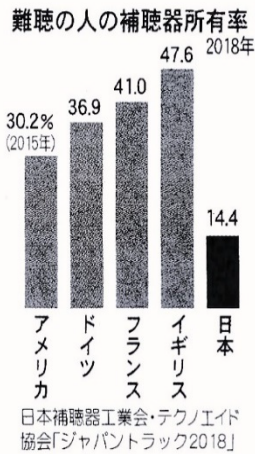
電子音が聞き取りにくくなります。言葉の聞き取りに支障が出るのは、60代、70代です。徐々に進行するため、本人が気づきにくいのも特徴です。「テレビのボリュームが大きい」「よく聞き返す」など周囲の人から指摘されるようになったら、耳鼻咽喉科で聞こえのチェックをしましょう。

進行してからの使用では、十分な聞こえの改善が得られません。両耳につけたほうが、広い範囲の音が立体的に聞こえます。

開始期に3〜6カ月 訓練と調整が必要

難聴は人により程度もタイプも違います。専門家のもとで補聴器を調整しなければ、聞こえの悪さを感

日本と欧米 公的補助に大きな差



欧米で補聴器を販売するには専門知識をもつ国家資格が必要です。またヨーロッパの多くの国では補聴器購入の公的補助制度があるため個人負担がないか、少なくなっています。日本では国の公的補助の対象は障害者手帳のある高度・重度難聴者に限られています。各地で中等度難聴者を対象にした公的補助を求める声が広がり、独自の制度をもつ自治体も増えています。

補聴器購入には、耳鼻咽喉科（補聴器相談医）を受診しましょう。「診療情報提供書」を発行してもらい、認定補聴器技術者のいる販売店で購入し調整します。医療費控除の対象になります。早めの対策が大事です。